

〔特集〕

私の研究人生；塞翁が馬

富澤 公子

立命館大学産業社会学部

要 旨

これまでの研究人生を振り返ると、“塞翁が馬”のことわざに例えられます。第二の人生として研究者の道を選んだ筆者にとって、博士論文と向き合ってきたこの13年はまさに臥薪嘗胆の時期となりました。さまざまな困難を克服して、ここに、一つの研究書を世に出すことになりました。研究で問いたかったのは、ネガティブな高齢者観が蔓延する世の中ではなく、高齢者が長生きを楽しめる世の中へ変えていく道筋でした。そして、老いの潜在能力を発揮できるコミュニティこそ、その要をなすことを実証することでした。本稿では、不遇な出来事を乗り越え、さまざまな研究者からの支援や調査地奄美の人々の支援を受けて完成に至った、一つの歩みを記しています。

キーワード：塞翁が馬，超高齢者，老年的超越，地域経営，博士論文

My research life: Good can come out of a misfortune

Kimiko TOMIZAWA

Part-time researcher

Faculty of Social Sciences Ritsumeikan University,
Nagoya Gakuin University Doctor of Business Administration

1 はじめに

大衆長寿の時代を迎え、人生はひと山の時代からふた山、そして、み山を生きることが可能になりました。高齢期は長すぎる老いの期間ではなく、第一の人生では実現できなかったことに挑戦し、自己実現するチャンスが到来したのです。

筆者は第二の人生として老年学研究の道を選びました。長寿と幸福な老い（サクセフル・エイジング）を研究するためです。このテーマは自身の老いへの学びでもあったのです。当初、第二の人生は自分が選んだものだから第一の人生よりも楽しいものだと思っていました。しかし、研究者の道を究め、学位を取得することの厳しさに遭遇しました。

いつ抜けられるかわからない長い、長いトンネルに迷い込んだ感覚を経て、やっと、今、『奄美のシマ（集落）にみる文化資本を活かした地域経営；長寿と人間発達を支える伝統と協働のダイナミズム』の博士論文を完成することができました。2006年に旧国立大学の博士後期課程に入学以来、ここに至るまでに実に13年の年月を費やしました。

当初は、博士論文は3年で書けると軽く考えていました。第一の人生で蓄積したものを活かすことができると思っていたのです。ですから、このような長期にわたる苦しい時間を味わうことは想定外のことでした。

しかし、第二の人生として選んだ道を失敗で終わらせたくはなかったのです。「諦めたら失敗になる。諦めない限り失敗はない。暗く長いトンネルもその先には必ず出口がある」と、自分に言い続け、書き続けました。筆者にとってのこの13年間は、正に、博士論文を書きあげてを目的に費やした期間でもありました。

やっと、この間惜しみなく協力してくださった方々、わがまを容認してくれた家族へ、結果を示すことができました。また、筆者の博士論文の完成を楽しみに待ってくれながら、亡くなられた方々にも報告ができます。

ここに至る長い期間、挫折しそうになる辛く過酷な時期が続きました。しかし今は、それは偶然でなく、筆者にとっては必然の出来事であったと思えます。だからこそ、当初の研究内容よりも質の高い研究書に結実したのだと、考えます。すべての出会いや出来事が、浅学凡才の筆者を研究者として育ててくれ、世に問える博士論文の完成につながったのだと、自負することができます。多くの人財に恵まれたこれまでの歩みを振り返れば、改めて筆者の研究人生は塞翁が馬だったと、思います。

2 研究者に至る人生

2.1 研究者となる動機

筆者は第一の人生を公務員として過ごしました。行政職でしたので、3年から5年で異動し、新たな仕事に従事することになります。部署が変われば全く異なる分野の人との出会いがあります。さまざまな分野の仕事を担当するなかで、各界を代表する方々とも仕事だからこそ出会うことができました。それぞれに、その道を究めた方々ならではの高潔で見識の高さに触れることができ、とても刺激的で、学びの深まる仕事でした。好奇心旺盛の筆者にとっては適職でした。役付きになってからは何かと板挟みに会うこともありましたが、府民の福祉に貢献しているという自負を持って仕事をすることができました。

第二の人生として研究者になろうと思ったのは、高校時代に癌で亡くなった親友との約束が

ありました。親友の最後という時に、何か大切なことを約束しておかなければと思い、一生懸命に考えて、「学校の先生になるね。見ていてね」と、約束しました。

しかし、その約束を果たせないまま、別の道で仕事をしてきました。これまでの人生に後悔はありませんが、しかし歳を重ねるにつれて、彼女との約束を叶えられていないことを考えるようになりました。

第一の人生の終わりが見えてきた時、第二の人生で、親友に約束したことを実現しようと考えました。子どもたちも巣立ちはじめていたので、やっと自分の好きなことができると思ったのです。

2.2 研究のテーマ

大学院での研究テーマはこれまでの仕事と関連しています。遡れば、平成元年に、旧厚生省においてゴールドプラン（高齢者保健福祉10か年計画）が作成され、そのもとに、各都道府県に明るい長寿社会づくり推進機構が設置されました。筆者はその立ち上げ時に京都府から出向し、財団設立、元気高齢者の生きがい対策事業を担当する機会を得ました。その業務のなかで、高齢者分野、特に自立した高齢者の生きがい施策のあり方に関心を持ちました。

その後、京都府立大学に配置換えになった時、予防医学の医師や料理研究者、運動トレーナーの方々と実践の場として、「夢のある高齢期を考える京都プロジェクト」を設立しました。代表者となって、長寿社会推進機構の助成金などを活用して、さまざまな提案・啓発活動を行ってきました。

特に、血圧の少し高い男性高齢者を対象として、料理実習・運動指導・健康知識を学び、自ら改善する非薬物療法の健康セミナーは好評で

した。また、一人暮らしの男性高齢者を対象とした食事づくりの冊子は新聞で紹介され、予想以上の反響を呼び、後刻、「いつまでもおいしい夢レシピ；向老期への料理メッセージ」として出版されることになりました。

そのような市民活動を通じ、高齢者分野への関心を高め、これらを学問的に深めたいという思いになりました。

勤めながら、研究と仕事を両立する生活がスタートしました。

3 大学院での学び

3.1 修士課程の時代

2002年に、立命館大学大学院社会学研究科に入学しました。30年ぶりに大学の門をくぐると、すべてが新鮮な驚きの連続でした。新しい学びにわくわくしていました。

学ぶ喜びや新しい知識を得る感動、先生の授業、助言やコメント、若い院生との交流、久しぶりのコンパや野外活動、それらのすべてが私を虜にしました。そのわくわく感を毎回書き留めているうちに、前期セメスターが終わる頃には1冊の本にするほどの分量になっていました。

この感動は、2003年に「遊び心とおもしろ心の社会学入門」として出版しました。修士の時の指導教員の勧めがあったからです。先生の推薦の言葉には、「本書を読んで、社会人が大学院で学ぶということがこんなに知的刺激にあふれ日常生活を豊かにするものなのかということ、実に具体的に実感させられた。大学院で教える側にいるわたくしは、本書によって大学院での社会人教育に確信を与えられ、どれほど勇気づけられたことか。…著者と同一ような社会的経験を持ちながら、大学院で社会人として学ぶことに踏み切れないでいる方には、是非本

書の購読をお勧めしたいものである。」と。研究の入り口で良い恩師に出会えた幸せに感謝しています。

また当時の上司で、大学院で学ぶことを後押ししてくれた前知事は、「『学ぶ』ことは人を生き生きさせる。『夢のある高齢期』に向けて学び続ける著者の姿は、高齢化社会を生きるこれからの私たちを勇気づけるものと思います」と、本の帯に推薦文を寄せていただきました。充実した2年間を過ごし、修士課程を修了することができました。

3.2 博士課程の時代

当初は修士課程で終わるはずでした。しかし、何か学問に対する不完全燃焼のようなもよもよ感が続き、1年後の2006年には、旧国立大学の博士課程に入学しました。この時から、博士論文の取り組みが始まりました。その頃、高齢者のポジティブな発達を示唆する「老年的超越」理論に魅力を感じていましたので、その研究している先生の研究室に入りました。

当時は、勤めながら大学院に通っていましたが、3年間で博士論文を仕上げられることを目的にしていました。土日勤務の職場に配置換えをさせていただいて、1週間のうち5日間は仕事、残りの2日は2時間かけて大学院に通うという、休みのない生活を送りました。しかし、苦にはなりませんでした。

3年になった時に、博士論文に集中するために勤めを辞めました。通学時間が惜しかったので、1年間の期限付きで大学の近くでひとり暮らしをすることにしました。その時の勝手を許してくれた夫や家族には今でも感謝しています。しかし、1年間で完成することはできず自宅に戻りながらも、その後1年間、自宅と大学とを往復する生活を続けました。

在学中に完成できなかった原因の一つには、指導教員との関係がありました。「老年的超越」理論を実証する視点や解釈、それに伴う調査票の設計、早く調査し3年間で論文を完成させたいと願う筆者と指導教員の間で、齟齬が生じてきたのです。段々と溝が深まり、意志の疎通ができなくなり、指導らしい指導を受けることなく、一人で悶々と研究する日々を過ごしました。

孤独な研究生活のなかで、2年の時に基礎論文は合格し、4年目に第1回目の博士論文を仕上げました。その時には、学会誌掲載論文3本と大学紀要1本の論文がありましたので、論文提出基準を満たしていました。しかし、完成させた論文は指導教員から酷評され、提出さえできないままに単位取得退学することになりました。

退学後も指導するという指導教員の言葉を信じ、メールで相談するも全く無視され続けました。意を決して、この4年間はアカデミック・ハラスメントにあたるのではないかと大学に相談するなかで、博士論文を再提出することになりました。そこで2回目の博士論文、そして3回目の博士論文を書いて提出しました。しかし、その都度、予備審査は合格するものの本審査の段階になると、なぜか、本審査の提出を断念せざるを得なくなるという繰り返しでした。

しかしながら、奄美の研究で得た成果は、世に問うべき内容と確信していましたので、書くことを諦めることはできませんでした。

4 退学後の博士論文の取り組み

4.1 研究の継続

単位取得退学後、修士時代の恩師の配慮を得て、立命館大学で研修生となりました。2年間、博論を継続して書く研究環境を与えていただき

ました。しかし、前述の結果から、以前の大学に博士論文を出すことは諦めました。

その後、恩師の推薦で立命館大学の非常勤講師として学生に教える立場になりました。学校の先生になると約束してから半世紀近くが経っていました。やっと天国の親友に、「私、やったよ。先生になったよ」と報告することができました。

それ以降、T先生との出会いもあり、大学の外部資金獲得の支援を受け、研究助成金の獲得に積極的にチャレンジし、本格的に研究を進めました。長寿地域である奄美群島（鹿児島県）や京丹後市（京都府）、遠野市（岩手県）で85歳以上の超高齢者を対象にして、質的調査や量的調査、フィールド調査を重ねてきました。

4.2 研究テーマの変化と深化

筆者の長寿と幸福な老いに光を当てたポジティブな長寿・高齢社会研究は、平成元年に京都府に設置された明るい長寿社会づくり推進機構（京都SKYセンター）に従事したことがきっかけです。平成の期間、公務員時代、市民活動、その後の研究者生活を通じ追求してきた、いわば、筆者のライフワークと位置づけられるものです。

そして、さまざまな研究者との出会いのなかで、当初の老年学や心理学、社会学を基礎とした理論形成から、文化経済学や経営学、民俗学などの学際的な視点から解釈を深めていきました。

在学中に提出した博士論文は、「老年的超越」理論を実証したものでした。この理論は、従来の老年学にはなかった、加齢に伴うポジティブな精神発達に注目した理論です。人には、加齢に伴う内的スピリチュアルな発達があり、それが叡智に向かう成熟であること。この傾向は

人に一般的に認められ、文化に普遍的であることを、提唱者のトーンスタム博士は北欧で実証しています。

筆者は、老年的超越を北欧と気候の異なる奄美で実証を行うことにしたのです。結果的には指導教員とは袂を分かつことになりましたが、質的調査の結果は、採択率の低い学会誌に老年的超越を実証した初めての原著論文として掲載されました。量的調査の結果は大学の紀要に掲載されました。この論文は、公表されて以来現在に至るまで、大学の論文の月別ダウンロード上位一覧に入っています。自分を信じて研究したことこの証だと思っています。

しかし、最初は老年的超越をテーマとした研究から、調査で度々奄美を訪問するにつれ、奄美の超高齢者のこぼれるような笑顔、大らかさ、超高齢期でも体を動かし、長生きを楽しんでいる様子に惹かれていきました。加えて集落の自然の営みを重視した暮らし、祭りや伝統行事が継承され、敬老や結いの習慣、役割のある超高齢者の暮らしを知るようになります。そこから、健康長寿を形成する要因がこのなかにあるのではないかとの仮説を立て、長寿の地域要因と支援要因を調査するようになりました。今回の博士論文につながるテーマが確定したのです。

4.3 人との出会いと研究業績

博士課程に入学した2006年から今日までの研究業績は、単著書1冊・共著書2冊、翻訳書1冊、学会・紀要論文等13本、学会発表17本になります。研究助成も4団体から受けました。入学した当初の2006年・2007年には、修士論文を書き直し、福祉文化研究に連続して掲載されました。

2008年に奄美の質的研究論文を学会に投稿したところ、再査読という結果が返ってきました

た。指導教員からは「どうせ駄目だろうけど出してみたら」と言われていたのです。再査読の対応について質問したところ、「丁寧に回答しなさい」と言われただけでした。困っていたところ、偶然にもシカゴの大学で教えているT先生が協力してくださることになり、無事に原著論文として掲載されました。

T先生からは研究姿勢や論文の書き方の基本的知識など、これまで学べなかったことを教えてもらいました。さらに、T先生のネットワークで、さまざまな研究者と交流する機会を得ました。

2009年、T先生の勧めで初めてアメリカ老年学会で発表することになりました。英語での発表はプレッシャーがありましたが、無事行うことができました。それ以降、T先生が共同研究者となって研究を進めてきました。

結果よりチャレンジすることが評価されるアメリカ流のやり方で、毎年積極的に研究助成金の申請を書き、毎年学会発表をしてきました。T先生の積極的なやり方のおかげです。シカゴとは14時間の時差がありましたが、メールのやり取りで、全く距離感なく行うことができました。

2011～2013年の3年間、T先生と映像の専門家の協力を得て、3人で奄美の超高齢者と祭りや伝統行事をカメラで撮ることにしました。この間の映像フィルムは100時間を超えています。ユニバーサル財団の研究助成金を得て、「長生きが幸せな島；奄美群島に息づく伝統文化とコミュニティのつながり」という30分のDVDにまとめました。このDVDは奄美の書店に置いています。授業でこのDVDを学生に見せると、加齢をネガティブに思っている学生の高齢者観が確実に変わります。作って良かったと思っています。

2012年から、市民大学院（文化政策・まちづくり大学院）を主宰する京都大学名誉教授の池上惇先生や、中谷武雄先生との出会いがありました。研究員となって池上惇先生の下で、文化経済学や文化政策などの学びを深めました。これまでの老年学の分野だけでなく、文化経済学の視点から潜在能力を秘めた存在としての超高齢者理解を深めました。これらの学びのなかから、奄美のシマ（集落）や超高齢者の人間発達の視点も加わり、学際的な視野から博士論文を書き進めることになりました。

2016年には、市民大学院で老年的超越理論の翻訳を行う研究会を立ち上げ、池上先生や中谷先生にも参加していただきました。

実は、博士課程時代に密かに老年的超越理論の日本語訳をしていました。この理論を是非、高齢者に関わる人にも読んでほしいという思いからです。ほぼ完成した時点で、出版できないかと指導教員に相談したところ、研究者は英語で読むから日本語にする必要はないと、即座に否定されました。これまで費やした時間が無駄であったように否定され、ショックのまま、お蔵入りにしていたのです。

再度開始した翻訳のまとめでは、特に中谷武雄先生に多大なるお世話になりました。校正も時間をかけてしていただきました。お蔭で、翻訳本は「老年的超越；歳を重ねる幸福感の世界」として、T先生との共著で出版することが出来ました。

2017年には、大阪ガスの研究助成金を得て京丹後市の協力も頂き、集落の区長を対象とした大規模な量的調査を行いました。同時に、私費で同じ調査を奄美の全市町村の全区長を対象に行いました。この大規模調査の結果は、奄美のこれまでの研究内容を裏付ける結果となり、一気に博士論文をまとめるエネルギーになりま

した。

2018年の3月には、池上先生のご指導、中谷先生のご助言を得て、4回目の博士論文としてまとめることができました。しかし、学際的研究なので、なかなか提出する先が見つからないでいました。

5 博士論文審査への道

5.1 十名先生との出会い

2018年6月、提出先を探していた時期に出会ったのが、名古屋学院大学の十名直喜先生でした。市民大学院の会議の帰りに地下鉄で一緒になった時、博論をまとめたが提出先がないことをお話したら、「博士論文を引き受けてもいいですよ」とのこと。言葉にできないほど、驚いた一言でした。

早速、論文をお送りしましたら、直ぐ読んでいただきました。「重厚な出来映えだが、5部編成の複雑すぎる構造になっている。肩に力が入りすぎたためか、難解で頭が痛くなる」とのこと。しかし一方で、タイトルの見直しをはじめ3部構成からなる修正提案もしていただきました。その提案は、目から鱗のように、論文に向かう姿勢を変えてくれました。

また、十名先生のご厚意で十名ゼミ（産業システム研究会）に参加させていただいて、さらに、博論のタイトルや目次構成など全面的に見直す機会を得ました。

5.2 博士論文の予備審査へ

2018年10月には、十名先生が窓口（推薦人）となり、名古屋学院大学の経済経営研究科に博士論文を提出しました。予備審査では、十名先生の定年退職に伴い、主査は古池嘉和先生にお願いすることになり、副査に十名直喜先生、木

船久雄先生、阿部太郎先生に審査に関わっていただきました。予備審査では、予想以上の厳しい指摘に大きな衝撃を受け、研究の深さと自らの至らなさを痛感いたしました。しかし、先生方から、研究論文としての重要な視点や弱点について詳細に指摘していただいたことが、今回の本論文の質を高めることにつながり、深く感謝いたしております。

5.3 本審査論文の提出へ

予備審査後も十名ゼミで、先生方のご指摘を踏まえ、本審査論文としてまとめ直す作業に傾注しました。超高齢者の発達理論（第1・2章）とその検証編（第2・3部）をつなぐ第3章を第1部に織り込み、奄美の長寿とコミュニティ論を「地域経営」の視点から編集し直しました。それによって、論文内容は劇的に深みと迫力を増したように思います。

懸け橋としての第3章が必要とのアドバイスは、予備審査の申請前にも十名先生からいただいていた。予備審査を経て、その重要性を痛感した次第です。

GW中に関わらず、十名先生から電子メールで集中指導を受け、それらを踏まえ最終の仕上げに取り組み、本審査論文ができました。十名先生と出会ってからご指導いただいた1年間は、これまでの研究人生の仕上げに向けた濃縮した1年となりました。十名先生との出会いに感謝いたしています。

6 おわりに

6.1 調査地奄美へのお礼

この博士論文は、調査地の奄美の方々のご協力やご支援によって完成したものです。伝統文化を継承している奄美のシマ（集落）に着目し

たことで論文の質が高まり、地域コミュニティの現代における持続的発展への見通しが生まれました。論文が提起した内容は今後の奄美にとって、大きな意味があると思います。そのことを、地元の方々も期待していただいていた。

地域コミュニティにおける社会経済システムを研究するなかで、奄美のシマ（集落）の文化資本の経営という発見があり、そこにおける超高齢者の人間発達が明らかにされました。この発見は、従来の偏見を打ち破り、超高齢者による健康長寿を生み出すシステムが奄美にあること。このシステムこそ、合計特殊出生率を高めて持続的発展を生み出しているということです。

奄美は、長寿・超高齢社会の今こそ、研究に値する場であります。これらを実証できたことは長生きを幸せと呼べる長寿・超高齢社会への新たな一步を踏み出したことになり、その意味は大ききでしょう。

第二の人生に研究者の道を選んだこと、そして、13年間継続したこと、奄美を選んで多くの人と親交を深めたこと。これらは第一の人生だけでは味わえなかった醍醐味です。これまでの人生、悲しいこと、うれしいことすべて含めて塞翁が馬です。そして、その歩みが博士論文として結実したのです。

6.2 指導を賜った先生方へのお礼

最後に、研究上のご助言・ご指導を賜っている池上先生、中谷先生をはじめとした市民大学の先生方、そして、学外者の研究者に対し博士論文審査を引き受けてくださった名古屋学院大学の古池嘉和先生はじめ、十名直喜先生、木船久雄先生、そして、阿部太郎先生のご支援に深く感謝申し上げます。

主な研究業績

著書・訳書

富澤公子著（2003）『遊び心とおもしろ心の社会学入門』かもがわ出版。

富澤公子編（2003）『いつまでもおいしく夢レシピ；向老期への料理メッセージ』かもがわ出版。

富澤公子著（2015）「遠野スタイル；超高齢者いきいき物語」『地域社会の未来をひらく；遠野・京都二都をつなぐ物語』水曜社、88-98頁。

富澤公子・タカハシ・マサミ訳（2017）『老年的超越；歳を重ねる幸福感の世界』晃洋書房。

論文

富澤公子（2009a）「奄美群島の超高齢者の日常からみる『老年的超越』形成意識」『老年社会科学』30(4)、477-488頁。

以下12本省略。